※令和５年９月まで展示していた掛軸です。

短歌「わが山や椎くれてゆくたそがれのしめりのなかのしら梅のはな　水穂」	太田水穂　昭和13(1938)年作　歌集『螺鈿』収録
「祝言興行　水穂作／ 雲を出て一入月のひかり哉／ 餅搗きをへて杵洗ふ臼／ とりあげてみれば誠に男なり／ 囲炉裏に薪のはぜる元日／ 日のあたる藪の中よりささ啼きて／ 手水の桶の氷ゆるまる／ 表六句を書して送る　水穂自句」	太田水穂　掲載不明
短歌「さき足りておのれしづるる藤浪のながきひさしき心わするな　水穂」	太田水穂　昭和08(1933)年作　歌集『鵜』収録
短歌「このやどの梅に来て啼くうぐひすのはつはつしかるけさの一声　水穂」	太田水穂　全歌集になし
短歌「高島のうらの朝風にときはなつ百八十ふねの光りながれたり　水穂」	太田水穂　昭和15(1940)年作　歌集『螺鈿』収録
短歌「鉢伏の山を大きく野にすゑて秋年々のつゆくさの花　光子　九十歳」	四賀光子　昭和23(1948)年作　歌集『双飛燕』収録
短歌「常念の峯にゐる雲しばしだに晴れよとまちて時たちにけり　喜志子」	若山喜志子　昭和28(1953)年作　歌集『眺望』収録

短歌「園の花つぎつぎに秋に咲きうつるこのごろの日の静けかりけり　牧水」	若山牧水　大正 10(1921)年作　歌集『山桜の歌』収録
短歌「秋風のそら晴れぬれば千曲川しろき河原に出てあそぶかな　牧水」	若山牧水　明治 43(1910)年作　歌集『路上』収録
短歌「光さへ身にしむ頃となりにけり時雨にぬれしわが庭の土　赤彦」	島木赤彦　大正 10(1921)年作　歌集『太虚集』収録
短歌「山道にゆうべの雨の流したる松の落葉はかたよりにけり　赤彦」	島木赤彦　大正 11(1922)年作　歌集『太虚集』収録
短歌「親すずめしきりになきて自が子ろをはぐくむ聞けばなげくに似たり　赤彦」	島木赤彦　大正 11(1922)年作　歌集『太虚集』収録
短歌「どうだんの枝移りして飛ぶ雀枯葉音を立つうつるがままに　初冬　家居　空穂」	窪田空穂　昭和 04(1929)年作　歌集『さざれ水』収録
短歌「わが立てる大竹ばやし葉ごもりに鳴るは空よりふり来る雨か　嵯峨野にて　空穂」	窪田空穂　大正 10(1921)年作　歌集『青水沫』収録
短歌「みちのくのそとなる蝦夷のそとを漕ぐ舟より遠くものをこそおもへ　佐久間象山　空穂書」	佐久間象山　『愛国百人一首』収録
自筆書簡「光男君病漸くあつく自ら終焉の近きを知るや・・・　伊藤左千夫撰幷書	伊藤左千夫　大正 02(1913)年書
短歌「上代よりいへる荒魂和魂のふたつ合し居ば事なるべしや　麓」	岡麓　掲載不明

短歌「庭にいでてもぐらの穴に水をつぐこの気散じのわれを笑はす　瀏」	斎藤瀏　昭和14(1939)年作　歌集『四天雲晴』収録
短歌「ふたたび来てやまのみどりにむかひ居りこの木かのきにみおぼえのある　迢空」	釈迢空　掲載不明

※令和5年7月まで展示していた掛軸です。

短歌「晴天にひと花ひらく白牡丹海とほくみゆる青芝の庭に　水穂」	太田水穂　昭和12(1937)年作　歌集『螺鈿』収録
短歌「菊の露しづれしづれて真玉ともおもふ夕べのこほろぎの声　水穂」	太田水穂　昭和17(1942)年作　歌集『流鶯』収録
短歌「屋廂に音たててふる榎の落葉こころけふよりしぐれを恋ふる　水穂」	太田水穂　昭和13(1938)年作　歌集『螺鈿』収録
短歌「人ごころあやふきに花鳥の天のひろ道いや盛んなれ　水穂」	太田水穂　昭和21(1946)年作　歌集『流鶯』収録
短歌「ゆくりなく枝をはなれてちる花のそのひとひらのゆくかたもみむ　水穂」	太田水穂　昭和09(1934)年作　歌集『螺鈿』収録
短歌「一夜ねて雲とぶそらに今朝きくや即非の松の秋かぜのこゑ　光子」	四賀光子　昭和07(1932)年作　歌集『朝月』収録
短歌「うす墨にあゐのふじみてすそのなす野なかのふじによる雲もなし　喜志子」	若山喜志子　全歌集になし
短歌「わが庭の竹の林の浅けれどふる雨みれば春は来にけり　牧水」	若山牧水　大正05(1916)年作　歌集『朝の歌』収録
短歌「かたはらに秋くさの花かたるらくほろびしものはなつかしきかな　牧水」	若山牧水　明治43(1910)年作　歌集『路上』収録
短歌「風にむかふわが耳鳴りのたえまなし心けどほくただ歩みをり　赤彦」	島木赤彦　大正09(1920)年作　歌集『太虚集』収録
短歌「わが庭の池の底ひに冬久し沈める魚の動くことなし　赤彦」	島木赤彦　大正09(1920)年作　歌集『氷魚』収録
短歌「福寿草の莟いとほしむ幼子や夜はゐろりの火にあてて居り　赤彦」	島木赤彦　大正10(1921)年作　歌集『太虚集』収録
短歌「電燈の遠き灯のさす草の葉の土にはへるが皆ゆ（らぎ出づ）　空穂」	窪田空穂　昭和10(1935)年作　歌集『郷愁』収録

短歌「ふる里にありやとまどふタぐれを蕎麦うつ音のもりて来る家　空穂」	窪田空穂　昭和24(1949)年作　全歌集になし
短歌「ふれがたき枝と見ゆれどぼけの花こぼるるばかり赤き花さく　寛」	与謝野鉄幹　歌集『相聞』収録
短歌「山めぐりさとめぐりしてむらしぐれ木々の紅葉を千々に染らむ　八十六叟　浅井洌」	浅井洌　昭和09(1934)年作　掲載不明
俳句「大空に又わき出でし小鳥かな　虚子」	高浜虚子　大正05(1916)年作　句集『五百句』収録
俳句「新茶煮て此緑陰の石を掃ふ　七十九　鳴雪」	内藤鳴雪　明治42(1909)年作　句集『鳴雪句集』収録
俳句「鳥一聯浅間かすかに噴きゐけり　美穂」	田中美穂　掲載不明

※令和５年５月まで展示していた掛軸です。

短歌「高はらの古りにし駅に霽るる日の明るさ入れて郭公の啼く　水穂」	太田水穂　昭和21(1946)年作　　歌集『流鶯』収録
短歌「ゆくりなく枝をはなれてちる花のそのひとひらの行方もみむ　水穂」	太田水穂　昭和9(1934)年作　　歌集『螺鈿』収録
短歌「なにごとかありけるごとく芥子畠の芥子ひとところ風にさゆらぐ　水穂」	太田水穂　昭和15(1940)年作　　歌集『流鶯』収録
短歌「明日はこむ霜のけはひを大空のまたたきにみせてさゆる月かも　水穂」	太田水穂　全歌集になし
短歌「まかがよふ光のなかにあぢさゐの玉のむらさき冷やかに澄む　水穂」	太田水穂　昭和5(1930)年作　　歌集『鷺』収録
短歌「たらちねのははをこふればいはけなく心は泣かゆ老いづく今も　光子」	四賀光子　昭和17(1942)年作　　歌集『麻ぎぬ』収録

短歌「春の野のしたもえ草のあさみどりあやふくぞおもふ生ひ立つ子等を　喜志子」	若山喜志子　昭和5(1930)年作　　歌集『現代短歌叢書　若山喜志子篇』収録
短歌「うす紅に葉はいち早く萌えいでて咲かむとすなり山ざくら花　牧水」	若山牧水　大正11(1922)年作　　歌集『山桜の歌』収録
短歌「冬山にたてる煙ぞなつかしきひとすぢ澄めるむらさきにして　牧水」	若山牧水　大正10(1921)年作　　歌集『山桜の歌』収録
短歌「死火山の裾野の冬の猶長き日かず思ひつつ灯をともすかも／西窓のうすら明りに藁を打つとなりの音のはや聞え居り／明治四十五年夏七月　柿の村人」	島木赤彦　明治45(1912)年作　　歌集『馬鈴薯の花』収録
短歌「草枯の国のくぼみにかたまれる沼のいくつに日のあたりけり　柿の村人」	島木赤彦　明治44(1911)年作　　歌集『馬鈴薯の花』収録
短歌「八丈島　はるばるに波の遠音のひびきくる木のかげ深く月夜の踊り　赤彦」	島木赤彦　大正3(1914)年作　　歌集『切火』収録
短歌「海の風南よりふけば六甲のたか根の草はみな花となれり　六甲山上にて　空穂」	窪田空穂　大正10(1921)年作　　歌集『青水沫』収録
短歌「道の辺のたかき黒松見あぐれば冬来し空の眼のうへに見ゆ　空穂」	窪田空穂　昭和2(1927)年作　　歌集『青朽葉』収録

詩「伝説の美女を背に戴せて先史時代の王者を征服する蝸牛　孤雁」	吉江孤雁　昭和5(1930)年作　　吉江喬松詩集『蝸牛の銀の涙』より
短歌「物思ふ葦にしあればゆく雲の高きに舞はむ心をわがもつ　青丘」	太田青丘　昭和22(1947)年作　　歌集『国歩のなかに』収録
短歌「ゆあみをへてさかづきとればはこねやまもみじもよへりみねのゆふひに　羽衣」	武島羽衣　掲載不明
短歌「霜を含む小鳥の啼く音細ければ朝は身にしむ山の静けさ　柊花」	中村柊花　昭和10(1935)年作　　歌集『山彦』収録
短歌「天つ日の照れる寂かさや畳なはる山並のうねり四方につづける　古實」	藤澤古實　大正10(1921)年作　　歌集『国原』収録